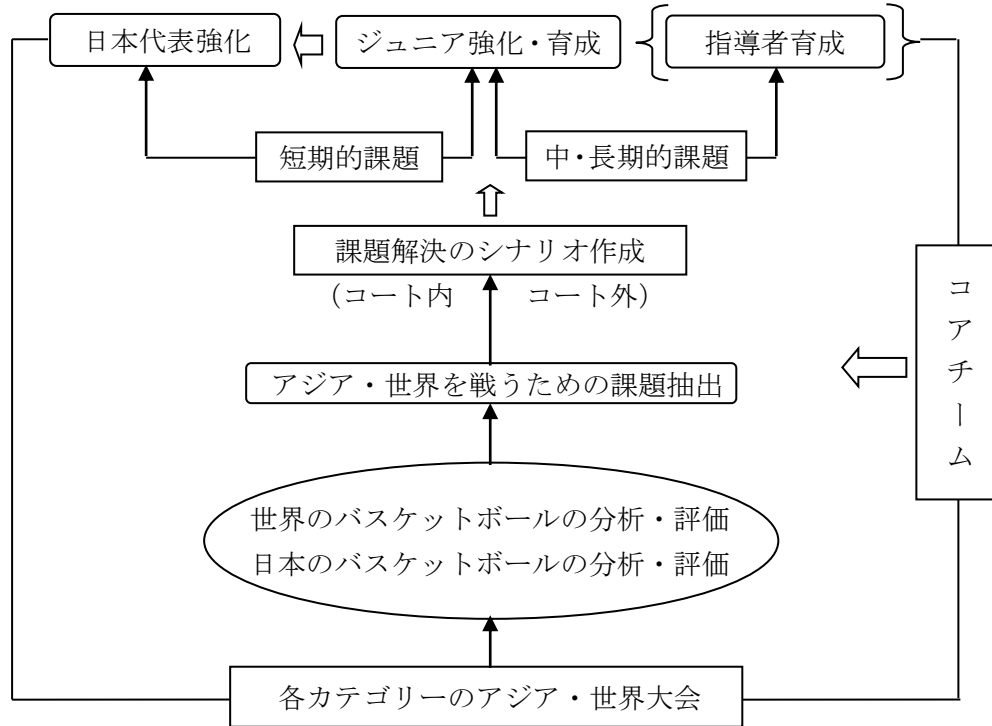


日本代表女子チーム強化のために

強化統括部 大神訓章

I. 基本課題

三位一体の強化



<キーワード>

普及・発掘・伝達・追跡・育成・選考・一貫・連携・分析・企画・評価・記録

[三位一体の強化を構成する各要素の課題]

1. 指導者育成 (強化統括部主導の代表コーチ育成)

就中、「強化に特化した指導者育成」について言及すると、例えば、U-18は誰が引き継ぐのか。U-16は誰が担うのか。全日本代表の次のスタッフには誰が控えているのか。計画通りにはいくはずもないが、強化的発想からすれば、指導者育成には「国際経験を持った代表チームの指導者をどのように育成するか」であり、言わずもなから、国内講習会を受けてもらえるライセンス的事項ではない。一般的な指導者育成は、クリニック開催やライセンス取得講習会（B級など）を企画・運営しているテクニカル委員会の範疇であるが、代表を率いる指導者を輩出・育成するとなると別途考える必要があるのではないかと。「このレベルの指導者を増やす」「計画的に育成する」まさに強化統括部主導による「代表コーチ育成」を考える必要がある。

そして、その手法は、カリキュラムによる座学では育成できず、それには体験学習を介する他ないと思われる。

具体的には、次の5つが挙げられる。

- (1) 担当カテゴリーナーでの引き継ぎ経験
- (2) 上位カテゴリーへの参加経験
- (3) 下位カテゴリーへの参加経験
- (4) 海外クラブへの研修経験
- (5) 国際大会への視察経験

これらを数年かけて実施する。更に、実施するうえでの課題として、次の点に一考を要する。

- (1) 頻繁に現場（職）を離れることが可能か
- (2) 対象者を選ぶ際の基準や一貫性をどう持つか

2. 分析・評価 → 課題抽出 → 課題解決のシナリオ作成（情報共有の仕組み構築）

「アジア・世界を戦うための課題抽出」には、各カテゴリーがアジア選手権や世界選手権を終えて、それぞれのカテゴリーにおける課題を抽出・分析・評価し、次の事業に生かす、所謂、計画(Plan)、実行(Do)、評価(Check)、見直し(Action)というサイクルが前提にあって、「会議形式を設けて議論する」ことの必要性を求めたい。そして、この会議にはテクニカル委員会担当者や分析スタッフも入り、情報を共有することが強化・育成並びに指導者育成に生かされるのではないか。このような「情報共有の仕組み」を構築し、みんなが代表の強化に携わっているという実感を持つことにより、次の課題である「一体感を構築する」ことに連関するものと思われる。

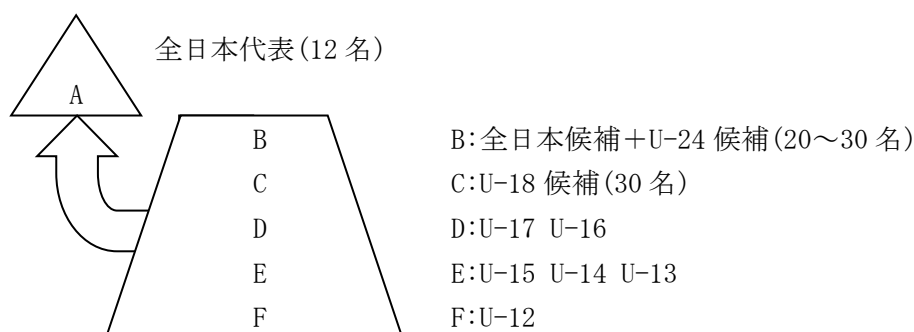
次に、課題抽出から「何をすべきか」の方法論については、「日本のこれから目指すバスケットボール」を示すことがまず必要である。それはヘッドコーチが変わっても、次に任されたスタッフや選手達を知るべき技術・戦術、習得レベルである。これまでも「エンデバードリル本」などで紹介されているが、「男女の違い（性差）」などが明確にされていないこともあり、受け入れてもらえない部分があった。テクニカル委員会でも独自の事業を推進するうえで、おおもとなる「日本の指向すべきバスケットボールの共通理解が必要である」と指摘している。

そこで、まずチームづくり、それに伴う課題について、各カテゴリー、或いは各委員会から具体的な方策・内容を引き出す必要がある。そのうえで、日本のバスケットボールの方向性を導く議論になるが、これには意見百出が予想される。これまでも、いろいろな方が「日本のあるべき姿」を提示されたが、いつも「それは○●の考える日本のあるべき姿だろう」「自分とは考え方が違う」的な意見が起こり、共有されてこなかった。「最善のシステムはない」ということを前提に、「どんなシステムであろうが、コーチが要求することに柔軟に対応でき且つその中で効果的な戦術行動がとれる【個】を創り上げ、そのためにどうすればいいか」である。そうなると、様々なシステムであっても、分解すれば幾つかの基本となるグループ戦術の連続になり、その核となるグループ戦術を明確にして、その訓練と必要な個人戦術の徹底的な訓練を重ねる。ここでもやはり「個の育成」が重要になってくる。

「日本バスケットボールの分析・評価」については、現状では、「情報分析のサポート」が機能し、分析スタッフの役割は、女子代表にとっては有効且つ重要であったかと思われる。分析データ・画像などは、カテゴリースタッフのみならず、しかるべき時期に、強化

育成・指導者育成・コーチコミッティでも活用すべきである。ただ、全てのカテゴリー分析スタッフにはビデオを撮って、PC を駆使してのメカニカル対応だけでなく、戦術、対人・対敵アジャスト等をスタッフに進言できる力を求めたい。

3. ジュニア強化・育成（ピラミッドの再構築：全日本強化に各カテゴリーをどう繋げるか）



(1) 一貫強化（どのカテゴリーからでも頂上に連結する構成）

① 全日本とアンダーカテゴリーとの連結

a. 学生強化と全日本強化との連結

* 大卒代表プレーヤー

・ 2011 アジア選手権：3(三谷, 名木, 久手堅)/12

・ 2012 世界予選：1(久手堅)/12+候補1(川原)/15 ← 減少傾向

* 2011~12 シーズンにおける大卒 W リーグ選手登録数

・ W : 42/110(38.2%) @高卒：61.8%

・ W1 : 39/ 54(72.2%) @高卒：27.8%

@1 リーグ制：81/164(49.4%)

* U-24 の再構築

b. U-18 強化と全日本強化の連結

U-18 の国際競技力が向上している中で、全日本に「連結」させることの責務は大きい。

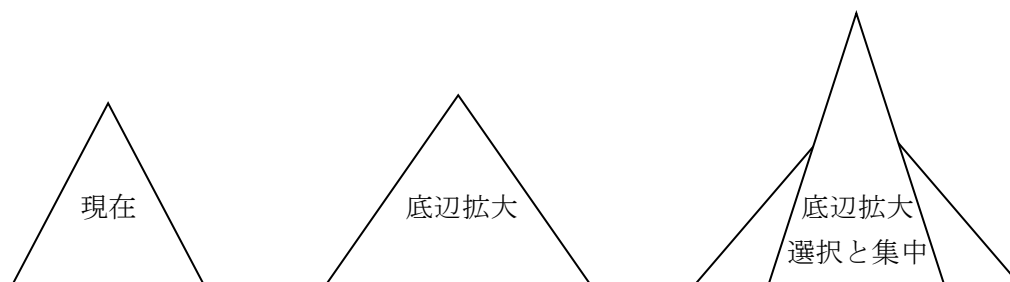
・ 高校 3 大会と FIBA 大会との日程重複を解消する必要がある。

・ 高体連との切り離しを模索することも考えられるか。

c. U-12 U-13 U-14 U-15 の育成と将来に向けた全日本強化との連結

バスケットボールの普及によって「競技人口拡大」を目指し、ピラミッドの底辺が拡大すればそれに伴う競争の増大により競技力というピラミッドの高さが自然に上昇するという一般的な考え方は、「身長」が大きな制限要因となるバスケットボール競技においては限界がある。「公平性」という観点からは外れるかもしれないが、「選択と集中」という考え方を浸透させ、世界の舞台で戦うために必要となる長身者については JBA が戦略的に発掘→育成→強化を実施する必要がある。女子については、現在 180cm 台の若手が比較的多く出現し、アジアでのアンダーカテゴリーの国際競技力が向上しているが、

他競技との競合もあり、今後も継続的・安定的に出現するとは限らない。更に増やしていくことや人種的に母数が限られる 190cm 台のプレーヤーを早期に発掘し、長期的視野に立って育成強化していくことは全日本強化には不可欠である。今アカデミーをスタートさせても成果が得られるのに少なくとも 10 年の歳月がかかることを認識し、早期に着手することである。



②ゲームプランの共有

- ・チームづくり → 戦術&ドリル
- ・日本が世界を戦うべくチームのあり方の構築
- ・ナショナルチームヘッドコーチのバスケットスタイルの伝達

③カテゴリースタッフの棲み分け

- ・専任
- ・責任
- ・連携

「全日本代表に連結することはどのカテゴリーからでも可能である」ということは、各カテゴリーにおける選手選出のあり方に、よりアピールできるものと思われる。2012 年度男子は高校生を候補選手に選出している。女子は 2011 年アジア選手権長崎大会において長岡選手（札幌山の手高 3 年）が全日本に入った実績がある。高体連事業（インターハイ）と全日本活動がバッティングするなどの現実問題から賛否あるが、U-18 カテゴリーから全日本に入ることができるという目標が選手達の高いモチベーションになり得たのは事実である。また、代表監督には様々なカテゴリー、特に女子は高校生に可能性のある人材が存在している現状から積極的にアンダーカテゴリーに足を運ぶことは、選手達のモチベーションを高める施策として異論はない。

一貫強化について、バスケットスタイルの一致は、どのレベルまでおこなうべきか、諸外国の例などを調査したうえで議論が必要である。アルゼンチンでは代表のシステム（例えばフレックスエントリーのパターン、ゾーンディフェンスのローテーションなど）をアンダーカテゴリーで練習している。同様に、トスティンによると、ドイツでは基本的な約束事や技術をアンダーカテゴリーでしっかり指導されている。これらは倉石氏、萩原氏等が多くの諸外国情報を蓄積しているし、また、至る所で開示されている。

翻って、一貫強化は、「同じシステムをどのカテゴリーでもおこなう」という意味に解釈されることが多いが、JOC の一貫指導システムは、「年代に即した最も適した指導内容を指導する」と捉えている。他方、近未来を見据えた一貫指導の考え方に「個人づくり」が

ある。個人の能力を育て、高めることが一貫指導であり、そして、その指導過程において、例えば、目標像をイメージしたときに「加藤貴子（ジェット）のようなステップワークができる選手」となれば（指導者間では）比較的共通理解が得られ易いものと思われる。実際に、このような個人づくりに関する中・長期的な課題が提示できれば、これが指導者育成やジュニア強化へと共有されていくことによって、段階的な課題解決が可能になり、多大な時間はかかるとも、確実に競技力向上の底上げになるものと思われる。そして、「どんな選手を育てていくべきか」という具体的な目標像の設定とその達成法の作成過程において、骨太のベクトルを共有することが可能になると思われる。次に、ゲームプランの共有は必至であるが、問題はプランニングである。強化スタッフが原案を作って提示することは必要であるが、一枚岩となるために、強化スタッフはもとより、テクニカル、レフリー、医科学（フィジカル）の方が入ることのマネジメント力が問われよう。カテゴリー専任制は、やるべき仕事が明確になればマンパワーの必要性を説くことができる。各カテゴリーコーチの専任化は、バスケット界の大きさから不可能なことではない。強化に育成の仕事も振り分けることができれば尚一層その意義は高まる。どのカテゴリーもニュートラルなスタッフ（協会付け）で対応しければこれ以上の施策はないが、ここで捉えるスタッフの棲み分けは、少なくともスタッフ個人の所属しているカテゴリーを「越境しない」「兼任しない」ということで提案したい。

(2) 国家(JAPAN)意識の醸成

「国家意識、JAPAN のプライドと責任」を論ず指導者が求められる。「日本」を外から見つめる機会がなければ「君が代」や「国旗」に対して思いが入ることがないのが現状である。国家意識醸成教育が学校教育の中でほとんど取り上げられていない中、選手たちの意識が薄いのは致し方ないとはいえ、スタッフが選手達に対して、国歌、国旗を敬うこと、国を代表して戦うことの意義や誇りを教えることの必要性を痛感している。2012年トルコ・アンカラで開催されたロンドンオリンピック世界予選の日本チームスタッフである丁コーチの「日本(JAPAN)」の意識指導は高く評価されるべきものである。

(3) 自立育成指導

自立無くして成長はあり得ない。その「自立」を促すには、選手達に「責任」が付帯する「裁量権」をどう持たせるかである。当然のことながら、自立した選手達には主体と責任が伴う。主体性をもって目標に向かわせることが大切なことであり、併せて、選手に裁量を課すことは、リーダーシップとフォロアーシップ育成に連関するものと思う。代表選手ゆえ、自ずから自立・自律ということに自覚を促したい。

4. 代表チーム強化に必要不可欠要素は何か

日本代表強化には現時点でも以下の要素について検討する必要がある。

(1) 公明正大

- ① 透明さ
- ② 大同団結

(2) 共有

- ① 意識
- ② 情報

(3) 組織

① 挙党体制の確立

- ・ 全員参加型（共通理解）
- ・ 責任分担制
- ・ トップダウン→ボトムアップ+プルアップ

② 専決事項のあり方

③ 専門委員会のあり方

(4) 環境整備

① プライド醸成

② 報償

(5) リーグの活性化が強化に連動

① 観客動員

② リーグの持ち方

③ 外国人選手の登録復活

- ・ 外国人選手との日常練習

(6) メディア対策

① 成績（オリンピック出場絶対条件）と連動することは否めない。

② ヘッドコーチ及び選手のメディア露出拡大

W リーグの活性化は、強化とは切り離すことができない絶対条件である。前向きに強化を捉えて、お叱りを受けるかと思うが、リーグの構成、運営を考えるべきでないか。また、外国人選手の登録復活は、その外国人選手が日常練習に欠かせない存在である。渡嘉敷選手や長岡選手が日常練習の中で、200cm 選手と戦うことが世界に通用する選手になる一歩となり、国際舞台で力を発揮するには外国人選手と対峙する日常経験の絶対量が必要である。国際競技力を身につけなければアジアや世界で戦うことはできない。登録復活には各チームの財政的な課題もあるが、現在の世界の経済状況、外国人選手の取り巻く環境条件を勘案しても決して実施不可能なことではない。

[三位一体の強化を実現させるための新しいアイデアの提案]

「三位一体の強化」による日本強化については、かつてその構想が描かれ、協会としてもその実現を目指してきたが、日本代表強化・競技者育成・指導者育成の三要素が機能的に連携するまでには至っていない。そこで、具現化するために、以下の2つのアイデアを新たに提案する。

1. 少人数精鋭のコアチームで、国内と国際の両面を表裏一体とした短・中・長期的 Future plan を策定する

(1) 戦略室 or 情報分析室 or 技術委員会 or テクニカル

(2) 人選

(3) プランニング

① 国際大会制覇に向けて

② コンセプトとシステムの構築

③実行

(4) ナショナル委員会とテクニカル委員会及びエンデバー事業との連携

2. 事業（行事）対応方式から恒常的対応方式に根本的にそして構造的に変える

(1) 外国協会との協力・交流協定の締結

①強化戦略の交流

②スタッフ

③選手の海外派遣

④例えば、トルコ協会との協定

・2014年女子世界バスケットボール選手権大会開催予定

(2) 単ジャパン海外派遣指定選手の設定とそのサポート

①基本的にはひとりで出す。

②サッカー、バレーにおけるヨーロッパ組のように国外で個人強化を図る。

(3) 特別強化指定選手制度の設定

①海外派遣指定選手をAランク

②全日本選手をBランク

③全日本候補選手をCランク

(4) その他海外でプレーする選択肢拡大のための情報収集・公開

強化基盤を国内に置くことは申すまでもないが、他方、外国において外国による個の強化を推進する必要がある。選手所属チームの十分な理解のもと、チームから全面的なサポート体制を得ることを前提にして、個人を外国に出して強化を図るサッカー、バレーに類する個人強化方式である。タフさ・逞しさ、外国人と対峙するに必要なスキル、そして国際競技力を身につけさせたい。併せて、語学力が身につけばこれにこしたことはない。外国チームからオファーがあれば躊躇なく、オファーがなくともJBAがアプローチの一助を担えないだろうか。いずれにしても、選手に「その気があること」が大前提になることは自明のことである。特別強化指定選手制度の設定については、JBA独自で特別強化指定制度を設け、選手の自覚と意欲を喚起する事案として提案したい。

II. 具体的課題

1. コーチングスタッフ

(1) ヘッドコーチ

①ナショナル：すべてのカテゴリーから絶対的信認を得る者

②Uカテゴリー：カテゴリー内から選出（ニュートラル含む）

③外国人コーチ：覚悟をもって招聘

(2) アシスタントコーチ

①ナショナル：・WJBL 総力

・外国人コーチ

②Uカテゴリー：カテゴリー内から選出

2. チーム編成

(1) 選考基準の明瞭化

①One on One の力

②スペシャリスト（スリーポイントシューター、ディフェンダー）

(2) ナショナル：長身帰化選手

3. 強化策

(1) 国内合宿

①内容精査

②他のカテゴリーとの合同

③男子チームとゲーム

④日程調整

(2) 海外遠征

①渡航先精査

②国別主催大会（数カ国参加）出場

(3) 分析の活用

①何をチームに還元するか。

②各カテゴリーと共有

(4) チームスカウティング

①代表チーム

②対敵チーム

・中国及び韓国の徹底分析

・世界予選対戦チーム分析

③成功例チーム

(5) 研修（勉強）会の実施

①ゲームプランニング

②戦術

③他のカテゴリースタッフとの情報交換

4. 日本独自のバスケットをどう構築するか

(1) ナショナルチームの戦い方の根幹になるものを全てのカテゴリーで共有する。

①ナショナルチームヘッドコーチの活用

・カテゴリーの合宿時に少なくとも1回のクリニック：伝達

②Uカテゴリーが基本的にナショナルチームと同じバスケットを目指す。

・Uカテゴリーのヘッドコーチが味付けをする。

・選手の能力・特徴に合ったチームづくり・戦い方をする。

(2) 優秀選手の発掘・育成

①Uカテゴリーにおけるポジションごとのランク付け

②可能性ある選手のランクアップ

③基礎・基本の習得

- ④One on One & パス & ドリブルの強い選手
- (3)国際大会の招致及び海外遠征の実施

- ①地元開催でのプレッシャー経験
- ②ジュニアチームにおける可能な限りで長め、数多くの海外遠征
- ③アウェイでのプレッシャー経験
- ④タフさ逞しさの習得
 - ・メンタル フィジカル 食事 時差 言葉 環境

Ⅲ. 世界を戦うチームづくり・ゲームプランはどうあるべきか

翻って、世界を戦うに、「トランジションゲーム」が最善なのか。それは、2011年夏ユニバーを戦ってみて、長崎(2011 FIBA ASIA)での全日本チームのゲームを観戦して……。また、男子リトアニア(対USA)を見て、一層そう感じた。当時のユニバー佐藤ヘッドは、ベストのチームづくり・戦い方をした。長崎を戦った全日本ヘッド中川さんは、もっと速く、もっとプレッシャーかけて、かき回して、かく乱して、……長崎ではセットになり過ぎた、と反省している。これらは「正論に論をまたない」。中川さんのアトランタやかつての尾崎さんのモンテリオールの実績がその証である。が、現状は、ユニバーはともかく全日本の使命(オリンピック出場)を考えると……トランジションゲームの検証は必至である。「速さで勝機」にも、リバウンド差を補うことは「勝利へ」の絶対条件になる。シュート確率が落ちればリバウンド差が顕著に……シュート試数とリバウンド機会のバランスである。シュート確率が高ければ、また、リバウンド力がイーブンなら問題はない。話題提供ということで、私見を纏めてみた。

1. 身長差をどう克服するか

- (1)トランジションゲームを前提における是非

- ①攻撃回数の検証
 - ・攻撃回数の増大はリスクと表裏一体
 - ・攻撃回数増大を狙うゲームプランとは
- ②世界の長身者
 - ・走れる & スリーポイントシューター
 - ・「長身者は遅くて走れない、インサイドでプレーする」の先入観除去
- ③勝ちゲームに繋がる攻撃回数と得点
 - ・攻撃回数：85回(平均14～15秒オフェンス)
 - ・得点：75～70点
 - ・確実に、しかも再現性のある得点
- ④リバウンドの数量的価値
 - ・平均身長1cmの差違は、リバウンド2.5本→10cm差は25本差に。
 - ・リバウンド1本は、0.9点→25本差は、23点差に。
 - ・リバウンド差がダイレクトに得点に反映
- ⑤トランジションオフェンスとハーフコートオフェンスのバランス

①2010世界選手権(チェコ・ブルノ)

- ・得点/Game：勝ちゲーム(2)日本61-59相手 <+2>
：負けゲーム(6)日本69-80相手 <-11>

- ・リバウンド/Game：勝ちゲーム(2)日本 44－相手 39 <+5>
：負けゲーム(6)日本 35－相手 48 <-13>

②2011 アジア選手権（長崎・大村）

- ・対韓国（予選）：日本 59-66 韓国 リバウンド日本 36-34 韓国 <+2>
- ・対中国（準決）：日本 62-76 中国 リバウンド日本 16-34 中国 <-18>

③2011 ユニバーシアード女子（中国・深圳）

- ・得点/Game(6)：日本 68－87 相手 <-19>
- ・リバウンド/Game(6)：日本 28－50 相手 <-22>
- ・敗因追：フリースロー得点/Game(6)→相手 14 点

④2012 ロンドンオリンピック世界予選（トルコ・アンカラ）

- ・得点/Game(5)：日本 63－62 相手<+1>
- ・リバウンド/Game(5)：日本 34－40 相手<-6>

(2)ディフェンス強化：世界を戦う絶対条件

(3)オールコートプレッシャーディフェンスの挑戦&限界

- ①フルタイム(40分)可能な個人体力
- ②個人体力の限界→チーム体力(10~12名)で補完
- ③常時トラップはギャンブル的要素が内包
 - ・バックコートでボールを奪うことは困難、突破されるとイージショット
- ④ひいてはオフェンスエネルギーへの欠如
- ⑤それはジャンプシューター及びスリーポイントシューターへの影響大
- ⑥意義とその有効性を検証
- ⑦チェンジングディフェンスに活路

(4)アウトサイド勝負の効率性

- ①内外のバランス攻撃
 - ・得点の分散化
 - ・ポストマン不在
- ②オフェンスのメリハリ
 - ・ブレイクとハーフコートオフェンスのメリハリ
 - ・ファーストチャンスで勝負も可、それもリバウンドの裏付け必要
 - ・3P シュートの確実性：スキルの精度アップ
 - ・チャンスの意図的作り
- ③ドライブとパスの強さに帰結
- ④ペイント内スコアラーの必要性

(5)ビッグマンの育成

- ①可及的課題
- ②リバウンダーの存在
 - ・リバウンドに絡むことができる。
 - ・3番目(ガード、フォワード)リバウンダーの絡み
- ③リングを背にするプレーヤーの存在

- ・ペイント内で得点ができる。（望ましいが：足技・シュートスキル）
- ・得点できなくともボールキープができる。（足技）
- ・得点できなくともペイント内アシストができる。（足技・パススキル）
- ・得点できなくともインサイドアウトができる。（足技・パススキル）

(6) ハーフコートオフenseのつくり

- ①スピーディーなコンティニュームービング
- ②パッシング・カッティング・スクリーニングの構成
- ③ドライブの有効活用 → インサイド → アウト
- ④3P シュート

(7) 戦術の議論活性化

- ①長崎 ABC のゲーム総括
- ②アンカラ世界予選のゲーム総括
- ③ユニバーシアードに見るチームの戦い方
 - ・女子：チャイニーズタイペイ準優勝の検証
 - ・男子：リトアニア対 USA→リトアニアのゲームプラン
- ④ヘッドコーチ経験者の経験知及び個人知の共有

実績あるかつての指導者や現在第一線で活躍しているコーチ等の指導及び戦い方がそのコーチ個人の「経験知」や「暗黙知」の中にあることから、それらが言葉、文字、映像、図表等で、見聞、見識できる「形式知」になれば、その「知」が多く指導者に共有され、それが将来に向けて、ステップアップする足がかりとなるのではないかと。

追記：2012 ロンドンオリンピック世界予選(OQT)分析について

世界を戦うには、自チームを知ること、他チームを知ること、それには数量的な裏付けを持つゲーム分析が一助になるものと思われる。2012. 6. 26～7. 1 にトルコ・アンカラでロンドンオリンピック最終予選が開催された。残念な結果は周知の通りである。その一部を分析し、報告するものである。

－試合結果－

- ・●日本 49 対 65 ○トルコ
- ・○日本 79 対 70 ●プエルトルコ
- ・●日本 47 対 53 ○チェコ
- ・○日本 79 対 51 ●韓国
- ・●日本 63 対 71 ○カナダ
 - ・5 ゲーム平均得点 日本 63.4 相手 62.0
 - ・●ゲーム平均得点 日本 53.0 相手 63.0

1. 攻撃回数

$$(1) \text{基本攻撃回数}(N) = \{S(1-P_{3D}) + T0 + G \times P_{30}\} \times 1/2$$

S:シュート数 P_{3D}:ディフェンスリバウンド率 T0:ターンオーバー

G:シュート成功数 P₃₀: オフェンスリバウンド率

(2)各ゲームの基本攻撃回数

- ・対トルコ : 63.5
- ・対プエルトルコ : 87.4
- ・対チェコ : 63.9
- ・対韓国 : 75.4
- ・対カナダ : 69.1

(3)攻撃回数:基本攻撃回数+オフェンスリバウンド数加算

- ・日本: 72.5(OR= 9) トルコ : 76.5(OR=13)
- ・日本: 98.4(OR=11) プエルトルコ : 96.4(OR= 9)
- ・日本: 76.9(OR=13) チェコ : 80.9(OR=17)
- ・日本: 84.4(OR= 9) 韓国 : 86.4(OR=11)
- ・日本: 74.1(OR= 5) カナダ : 82.1(OR=13)

2. ターンオーバー

(1)ターンオーバー数

- ・日本: 15 トルコ : 10 -5
- ・日本: 14 プエルトルコ : 9 -5
- ・日本: 13 チェコ : 21 8
- ・日本: 7 韓国 : 23 16
- ・日本: 8 カナダ : 17 9

(2)ターンオーバー 1本の-得点を算出

(3)算出法: 2チーム間の1回の攻撃で得点できる期待値 (満点値=2.23)

- ・日本: 49/63.5=0.77 トルコ: 65/63.5=1.02 1本: -1.79点
日本: 15×-1.79=-26.8 トルコ: 10×-1.79=-17.9
- ・日本: 79/87.4=0.90 プエルトルコ: 70/87.4=0.80 1本: -1.70点
日本: 14×-1.70=-23.8 プエルトルコ: 9×-1.70=-15.3
- ・日本: 47/63.9=0.74 チェコ: 53/63.9=0.83 1本: -1.57点
日本: 13×-1.57=-20.4 チェコ: 21×-1.57=-32.9
- ・日本: 79/75.4=1.05 韓国: 51/75.4=0.68 1本: -1.73点
日本: 7×-1.73=-12.1 韓国: 23×-1.73=-39.8
- ・日本: 63/69.1=0.91 カナダ: 71/69.1=1.03 1本: -1.94点
日本: 8×-1.94=-15.5 カナダ: 17×-1.94=-32.9

3. リバウンド

(1)スタートメンバーの平均身長

- ・チェコ : 189.0cm
- ・カナダ : 184.2cm
- ・トルコ : 182.2cm
- ・韓国 : 179.2cm
- ・プエルトルコ : 179.0cm
- ・日本 : 175.4cm (大神 吉田 藤原 高田 間宮)

(2) リバウンド獲得数

- ・日本 33 (OR=9 DR=24) トルコ 39 (OR=13 DR=26)
- ・日本 47 (OR=11 DR=36) プエルトルコ 36 (OR=9 DR=27)
- ・日本 33 (OR=13 DR=20) チェコ 44 (OR=17 DR=27)
- ・日本 34 (OR=9 DR=25) 韓国 40 (OR=11 DR=29)
- ・日本 23 (OR=5 DR=18) カナダ 43 (OR=13 DR=30)

(3) 身長によるリバウンド獲得数の差

- ・スタート平均身長差：チェコ 189cm－日本 175cm＝14cm
- ・チェコ獲得割合：18+14（平均身長差）/18+18+14＝0.64
- ・リバウンド総数 80 本とすると身長のみで捉えたリバウンド獲得数は
チェコ：80×0.64＝51 本 日本：80－51＝29 本
- ・リバウンド獲得差：51－29＝22 本
OQT では総数 77 本 チェコ：44 本 日本：33 本 差＝10 本
- ・平均身長 1cm はリバウンド獲得本数に 1.6～2.2 本の差が出る。

(4) リバウンド 1 本(R)：0.6～0.7 点

- ・ $R = \{S - (1 - P_3) + T_0 + GP_3\} \times 1/2$
- ・対チェコ戦：机上得点差：22×0.6＝13.2
13.2 点のビハインドでゲーム開始
10×0.6＝6 点差にカバー
- ・対韓国戦：オフェンスリバウンド 日本 0.87 点 韓国 0.50 点
ディフェンスリバウンド 日本 1.26 点 韓国 0.89 点

(5) ディフェンスリバウンドとオフェンスリバウンドの重要度比較

- ・ディフェンスリバウンド 1：2/3 オフェンスリバウンド

4. シュート

(1) シュート成功率

{	日本	FG:36%(19/53)	3P:22%(5/23)	FT:67%(6/9)
	トルコ	FG:39%(23/59)	3P:38%(6/16)	FT:81%(13/16)
{	日本	FG:44%(27/62)	3P:24%(5/21)	FT:71%(20/28)
	プエルトルコ	FG:37%(25/68)	3P:32%(6/19)	FT:82%(14/17)
{	日本	FG:29%(16/56)	3P:31%(5/16)	FT:67%(10/15)
	チェコ	FG:37%(20/54)	3P:36%(5/14)	FT:67%(8/12)
{	日本	FG:47%(33/70)	3P:44%(4/9)	FT:90%(9/10)
	韓国	FG:36%(20/55)	3P:29%(4/14)	FT:58%(7/12)
{	日本	FG:42%(25/60)	3P:21%(3/14)	FT:91%(10/11)
	カナダ	FG:46%(26/57)	3P:47%(9/19)	FT:56%(10/18)

(2) フリースロー

- ・5 ゲーム 日本 75.3%(55/73) 5 相手 69.3%(52/75)
- ・●ゲーム 日本 74.2%(26/35) 3 相手 67.4%(31/46)

5. まとめ

- (1) 基本攻撃回数は>70 回(17sec/1 回)であった。

- (2) ターンオーバーによる損失は、-12.1(日本)~-32.9点(チェコ・カナダ)であった。
- (3) リバウンドは総じて健闘したが、カナダ戦は敗戦の一因になった。
- (4) スリーポイントシュート力が脆弱であった。

6. 今後の課題

- (1) ゲームプランニング(テンポ)の構築
 - (2) ディフェンス強化(ターンオーバーの誘発)
 - (3) リバウンド強化(スクリーンアウトの徹底)
 - (4) スリーポイントシュートの確率向上
-

IV. 全日本女子チームのバスケットボール

2012年度全日本女子ナショナルチームのヘッドコーチは、2012FIBA世界予選を戦った内海知秀氏である。2016年リオデジャネイロオリンピックに内海体制で臨むことが決定した。此处で、内海氏が唱える「世界を戦う全日本代表チームの姿はどうあるべきか」について、内海氏の意見を参考に纏めた。

1. フィロソフィーについて

日本代表の指導者としてどうあるべきか。今回の世界最終予選に臨むにあたり選手達には3つの項目を掲げ指導にあたった。

(1) 立ち向かう力をつける。

私達は世界と戦わなければならない。身長差の克服は永遠の課題であることは言うまでもないが、このハンディをどのようにして克服しなければならないか。それには、まず、これまでのイメージを「日本は小さく速いチーム」から「日本は小さいが力強いチーム」に変える必要がある。リバウンド、ボディチェック、ポジション争い、インサイドシール等バスケットに必要な「体の当たり」に対して外国選手に負けない力をつけることである。当たり前のようにあるが、この当たり前のことを自分の意志で継続できる選手・チームが世界を戦えるチームであり、それには相手に対してどんな時にでも立ち向かう力(勇気)を持つことである。

(2) 乗り越える力をつける。

乗り越える力には、格上チームに対して「勝利を勝ち取る」という強い心構えと意思が必要である。勝負強い選手、勝負強いチームになるための技術を追求するとともに、世界の強豪チームに対して乗り越える力をつけなければならない。

(3) 日の丸の誇りを持つ。

全日本選手である限り、日の丸に対して「強い誇り」を持って戦わなければならない。「立ち向かう力」も「乗り越える力」も、この「日の丸の誇り」がなければ身に付けることはできない。全日本選手・チームである限り忘れてはならない最も大切な言葉である。

2. ゲームプランについて

ゲームに勝つために必要な個人の基本技術の向上は必須であるが、チームの戦略戦術のゲームプランを構築する必要がある。特にここ数年の情報分析による勝敗を決する要因(シュート率、リバウンド支配率、FBポイント等)が明らかになり、アジアや世界における対

戦相手の特徴を把握したうえで戦略・戦術を考え、戦いの準備すること、それがゲームプランである。

オフェンスでは、76点以上の得点を獲ることを目標にしたい。まずバスケットボールは確率の競技であることを認識し、ファーストブレイク、アーリーオフェンス、セットオフェンスの「メリハリ」をつける。ただ単に速く攻撃し、攻撃回数を増やすことが日本にとっての最善の攻撃ではない。特に、リバウンド獲得数とディフェンスのピックアップ対応が速くなってきていることから、リバウンドからのファーストブレイクはそう期待できるものでない。そこでアーリーオフェンス（セカンダリーブレイク）であり、ディフェンスが強い状態にセットされていない状態での得点である。ハーフコートオフェンスは、スクリーンを利用した得点、スペースを作り、カットして飛び込むプレー、ドライブからインサイドとアウトへの合わせプレー等で得点する。日本にとって3Pシュートの試投数とその確率を上げることは重要であるが、併せて、中間距離の得点とドライブでディフェンスを崩す力が必要である。世界最終予選では間宮(184cm)がインサイドで多く得点できたことや不安定感は否めないが高田(183cm)の1対1の力は明るい材料となった。渡嘉敷(191cm)が加入することを考えれば、戦略戦術にまた違った影響を及ぼすものと思われる。今後は、インサイドとアウトサイドの得点バランスを考えながら、何としても180cm前後の安定したしかも勝負強い3Pシューターを育成しなければならない。

ディフェンスでは、70点以下で抑えることを目標にする。それには、1対1のボールマンプレッシャーと徹底したチームディフェンスである。特に身長差でハンディのある日本にとってインサイドディフェンス（ローポストトラップ等）は非常に重要なディフェンスである。簡単にバスケットの近くでボールを持たせないように押し出し、ヘルプサイドは寄りを速くし、1個のボールをチームで守る。しかし、このトラップディフェンスも安易に仕掛けると簡単に崩されてしまう恐れがあり、スカウティングをしっかりとしたうえでトラップ戦略を実行していかなければならない。また、現在はこの国でもアウトサイドシューターがいることからディフェンスの運動量を増やして対応したい。世界的に多用されているウイングやトップでのオンボールスクリーンプレー（主にピック&ロール）に対する対策、そして、マンツーマンの他に相手のリズムを崩すゾーンやチェンジングディフェンスを考えている。更に、日本にとって大きな課題であるディフェンスリバウンド対策は、必要不可欠である。いずれにしろ日本がアジア、世界で勝つためにはディフェンス強化は欠かせない。

(1) トランジションオフェンスとセットオフェンスの目標値

FG・・・47%

2P・・・50%

3P・・・39%

FT・・・83%

(2) 攻撃目標回数と総得点

2P・・・40本(40回) Made20本

3P・・・18本(18回) Made 7本

FT・・・18本(9回) Made15本

T0・・・13本(13回)

合計攻撃回数 80回

総得点 76点

3. オフェンスについて

(1) ブレイクの組み立て

アウトレットパスを高い位置に出すことによってボールを速くフロントコートに運ぶ。ただし、パスの距離が遠すぎないようにする。スリーレーンを作りアウトナンバーで①レイアップショット②2Pジャンプショット③3Pショットの順で得点を狙う。

(2) アーリーの組み立て

スリーレーンでアウトナンバーができていない状態であれば素早くアーリーオフェンスに入る。スリーレーンのウイングの選手はコーナーまで走りきることによってディフェンスを下げ、トレーラーがトップでシュートを狙う。最終的には組織的なアーリーオフェンスに入っているが速さだけでなくタイミングがポイントになる。また、オンボールスクリーンを使用したアーリーオフェンスは効果的である。

(3) ハーフコートオフェンスの組み立て

ハーフコートオフェンスではマンツーマン、ゾーン共に、スペーシング、ボールと人の動き、スクリーンの使用、カッティング、タイミングにより組み立てる。特に基本的なオフェンス（レギュラーオフェンス）を作り上げていく必要がある。スペースを作り動きの量を増やすと共にオンボールスクリーンやフリースクリーン、バックスクリーン、スリップレーなどの2対2や3対3の組織的な攻撃の中から選手個人の1対1を仕掛けることや幾つかのナンバープレーを作る必要がある。

(1) マンツーマン

- ①ワンガード ツーガード
- ②シングルポスト ダブルポスト ファイブアウト
- ③コンティニューオフェンス
- ④ナンバープレー
- ⑤OBプレー

(2) ゾーンオフェンス

- ①ベーシックオフェンス
- ②ナンバープレー
- ③OBプレー

4. ディフェンスについて

(1) マンツーマン

- ①Low Post Trap Defense
- ②Screen Defense
 - ・ On ball Screen
 - Wing & Top Position
 - ・ Back Screen & Down Screen
- ③Switch Defense

④Sift Defense

(2)ゾーン

①2-3 Match Up Zone

②3-2 Match Up Zone

③Changing Zone

④Point Ball Zone

(3)プレスディフェンス

①Man to Man Press

②1-2-1-1 Zone Press

③2-2-1 Zone Press

④Half court Trap Zone Press

今後、日本がアジア、世界で戦うためには精神的な強さとタフな技術力を身につけていかなければならない。これらは国内での強化合宿だけでは強化できるものではなく海外での強化試合を多く取り入れるとともに、日本に外国チームを招聘し外国人選手との試合を多く経験させることが重要である。特に、有望な若い選手が数多く存在していることから、継続的に強化し、アジアで中国・韓国を破り、2年後の世界選手権大会（イスタンブール）、そして4年後のオリンピック（リオ）の出場権を獲得したい。そのためにも強化統括部のもと、スタッフ、情報分析等、チーム関係者一丸となって強化に邁進していきたい。

V. ユニバーシアードを戦うために

ユニバーシアード大会には、ここ3大会は大学生のみでチーム編成し参加している。しかし、世界を戦うには戦力不足は明瞭である。特に、4番5番ポジションの力量不足は否めない。そこで、大卒有資格選手を加えてチーム編成できないだろうか。最強チームをもっての大会参加である。所謂、U-24 カテゴリーの再構築である。3大会前まではU-24としてWJBL選手を加えて編成していた。しかし、ここ3大会(2011年：深圳、2009年：セルビア、2007年：バンコク)は、学生で世界を戦った。そして、学生のみ編成によって学生強化が図られてきた実績がある。アメリカの大卒からWNBAのような制度（WNBAは大卒が契約条項にある）変更、また、日本男子の「大卒からJBL」への進路が既成事実、については、日本女子界では期待できない現状を踏まえ、更に、女子学生強化が埋没しないよう熟慮しながら、下記のような問題提起をしたい。

1. チーム編成について

(1) 学生単独(U-22)で編成するのか

① 学生の目標且つ刺激になっている。

② 学生強化の施策になっている。

③ しかし、世界を戦うには力量不足（特に4, 5ポジション）である。

(2) ユニバー有資格(U-24)大卒WJBL選手を加えて編成するのか

① 戦力アップになる。→ 最強チームの編成になる。

② 大卒選手の「ナショナルに向けて」への経験になる。

2. スタッフの編成について

- (1) 大学関係者で編成
- (2) WJBL スタッフを加えて編成
- (3) ニュートラル
 - ① ヘッドは専従コーチ
 - ② 大学教員の兼任では多忙（授業・公務・自チーム指導等）過ぎる。
 - ③ 大学の学事歴（学年歴）に合わせた強化計画からの脱却
 - ・ 単位修得に配慮する必要がある。

3. 強化策について

- (1) 単年度強化の延長
- (2) 2年計画でユニバーに臨む
- (3) 隔年の棲み分け
 - ① ユニバー当年度
 - ・ WJBL 大卒有資格選手でチーム編成(U-24)する。
 - ・ 最強チームを編成して大会に臨む。
 - ② ユニバー無年度
 - ・ 大学強化年度にする。
 - ・ 大学生のみで編成する。
- (4) 海外遠征
 - ① JBA 強化事業はユニバー当年度に実施する。
 - ② 大学連盟海外遠征事業はユニバー無年度に実施する。
 - ・ 李相伯杯に代わる事業として実施（台湾遠征）実績がある。
 - ・ 予算化されている。
- (5) ナショナルヘッドコーチのクリニック

4. 課題

- (1) 大学連盟女子強化部と WJBL の連携
- (2) 強化日程の調整

大学連盟の中に、強化を強力に推し進める人がいなければ強化事業（特に海外遠征など）は、実施するに至らない。国際的ネットワークも必要である。誰かが積極的にどんどん進めていかなければ施策は止まる。また、誰かに任せる体制だと誰も整えてくれない。強化委員は存在するが、マネジメントをする人がいなければ事業は、継続・推進できない現状があり、このことは最悪事業実施ができないことに繋がる。また、「大学界としての既得権益を放棄することの難しさ」は現実的な問題である。即ち、U-24 カテゴリーを再構築することにより、学生の国際大会出場機会は確実に減少することに連関する。当然抵抗があるものと想像する。大学連盟女子強化部の立場で「我々が出すべき成果は何か」の問答をする必要がある。就中、ユニバーについては「出すべき成果は何か」が十分に問われないうまま「大学界の利益（大学強化）を守ること」が優先されてきたことも他方あるかもし

れない。「成果」に焦点を当てた行動は、既存のルールや人間関係を壊すことが多く、実際におこなうには超えなければならない壁や配慮しなければならないことが多々存在することも事実である。これらについてはユニバー当年度と無年度の活動をうまく調整することにより、大学側にも WJBL 側にもメリットが生まれる妥協点を早急に見出す必要がある。

VI. U-12～U-15 の強化・育成のために

日本オリンピック委員会(JOC)は、2001年に10年間でオリンピックのメダル倍増を目指して国際競技力向上戦略(ゴールデンプラン)を提起した。特筆すべきことは低年齢層の競技力向上が謳われていることである。

そこで、既に展開しているエンデバー事業におけるU-12～U-15育成について、その施策をサポートできないだろうか。事業内容によって共有し、強化の側面から後押しできないだろうか。また、新規事業が参入できないだろうか。世代を担うカテゴリーであるだけに強化と絡めて育成する必要がある。

1. 指導者育成について

ミニは、多くの指導者が教員でない実情もあり、指導者が子供の将来を見据えた教育的指導ができるかどうか現実問題である。中学校指導者もミニ同様に外部コーチの依存率が高く、また、トップ指導者とそれ以外の指導者との格差が大きいように思われる。ようやくエンデバー活動を通じて取り組まれるようになったが、カリキュラム内容、指導者育成システムの構築等、積極的にテクニカル委員会を中心にJBAが関与していく必要がある。

U-13～U-15カテゴリーは、中学校連盟、中体連の組織が絡み合った年代である。全中は、中体連主催、ジュニアオールスターは、中体連主催(JBA主催)の違いがあり、指導者ライセンスも同様である。テクニカル委員会を通して中学校連盟及び中体連と密に連携をとりながら指導者育成に努める必要がある。

2. 強化・育成について

プレゴールデンエージ、ゴールデンエージ世代の指導充実が緊急の課題である。「若手：低年齢層の育成」のエンデバー事業について、強化の立場からも意見が求められよう。具体的には、エンデバー事業は、年に1回行っているが、これを13～15歳に対してのJBA事業として充分とするかどうか、男子で始めようとしている「エリートアカデミー事業」を女子ではどのようにするか、といった「強化事業の低年齢化」に即して実現する方向で考えるべきではないか。そのためにナショナル委員会とテクニカル委員会(エンデバー担当)が強化の有り様を再構築することが必要である。

日本のバスケットボール強化を推進するうえで、若年層からの計画的強化はいうまでもない。他競技、他国の強化は既に進めている。シドニーオリンピックに向けてのオーストラリアは、AISを作り、強化した。アルゼンチンは、ジノビリ、スコラたちを全国から中央に集め、継続的に強化を行い、世界一を獲得した。スペインは、2006世界選手権に向けて選手を集め、継続的に強化に取り組み世界一になった。日本の強化はこの年代から始めるべきであり、いやもっと早くから取り組まなければならない。サッカーは、幼稚園児の取り込みを意識しているといい、ハンドボールやバレーボールもしかりである。どういう事業がこの年代に可能なのか。また、すべきなのか。「海外遠征が有効である」という人も

いる。ジュニア NBA という試みがどこかでおこなわれている。あのような「海外にチャレンジする事業」によって視野が世界に広がり、日本国内だけでは受けられない刺激があることも事実である。

また、県レベルで熱心なところは選抜を組み、練習会を年に 8～10 回行っている。この仕組みがまさに「トレセン制度」であり、選抜メンバーを地区レベル、県レベルで指導し、優秀なメンバーは、さらにブロックに、中央に引き上げられる仕組みがサッカーのそれである。エンデバー委員会でも 2011 年からこの仕組みを「拠点作り」と呼び、実現できないものかと試行錯誤している。過密スケジュールの中、県レベルでの理解が得られるところから実施できるかどうか、である。

3. 指導内容について

これまで提示された指導内容について、更に、加筆・修正しながら、「年代別指導内容」として体系化し、ひとつの形を提示することが課題である。しかし、年代別指導内容を作成するにあたっては、「日本の目指すバスケットボール」がある程度具体性を持たなければ指導内容を分解して提示することができない。

2001 年より「エンデバー計画」と称して、「競技力の向上のためには、低年齢層から正しい技術や知識を指導する必要がある。」という認識のもとで、全国規模におけるバスケットボール一貫指導という指導法を含めた指導内容の指針を提示している。示された「エンデバードリル本」は、技術を分解した内容であるが、年代別にまでは整理できていないように思う。指導者育成でもカリキュラムを作成する課題があり、エンデバーでも指導内容を更に充実する課題がある。強化でも代表のチーム作りをする際に、どのようなバスケットボールをどのようにするか課題がある。また、指導者育成ではライセンス別のカリキュラム作成課題があり、エンデバーでは U-18 ブロック・トップ、U-15 トップ、U-14 トップ、U-13 ブロック、U-12 ブロックのそれぞれのカリキュラム作成課題がある。それぞれがそれぞれの課題解決に向けて努力しているのが現状であり、更に、強化、テクニカル、レフリース、医科学等が英知を結集して取り組む必要がある。

シュティイーラー(G.Stiehler)は、「選手育成及び競技力向上を効果的で内実のあるものにするには、選手の発育発達に即した技術の発展を考慮しながら段階的に導くことが重要である。」と指摘しているように、スポーツ技術が如何なる段階を経て習得されるかは、指導の際の重要課題である。日本サッカー協会は、1988 年から選手育成のためのスポーツカリキュラムの研究を推進し、発達段階に即した技術指導に関する体系化を図り、その結果、競技力向上の側面で顕著な成果を挙げていることは周知の通りである。

このような事由を踏まえれば、U-12～U-15 カテゴリーに対する指導をどう実践するかは、将来の日本のバスケットボールの競技力向上を左右する大きな課題であることは論を俟たない。

Ⅶ. おわりに

「世界を見据えた強化策の推進」こそ、日々の強化育成を進めていくうえで不可欠であると思う。「世界制覇」は届かない空しい夢とは思えない。その夢実現に向けて、提案施策が「今までと何が違うのか」、「何が引かれて何が足されているのか」、「これが実現

すると何が起こるのか」などを「どう短時間で簡潔に説明」するかが当面の最大課題である。即ち、各組織且つ各人に周知し、理解を得ること、そのうえで、実践する「具体的アクション」に起始することになる。

これまで、強化本部会、強化委員会、ナショナル委員会、各カテゴリー強化部会、エンデバー委員会、コーチ委員会、指導者育成委員会、技術委員会、既出の JBA 変革 21、その後の「未来を創る」など、各部署で各論が展開されている。その各論が行われている「縦割り」且つ「階層的」な現状を克服するために、なんとかして「関係者一同」を実現することが必要である。そこで、議論が起これ、「本当にそうだな」という結論に至るかどうか。そして、「ではやってみよう」となったときに、目標同一にして大同団結（一枚岩）になれるかどうかである。「総論賛成」、利害が対立する場面での「各論反対」では、ことは行き詰まること明白である。「アイデアを実行に移すために、皆が win-win になるアイデア」が絶対に必要である。議論の余地は余りある。強化テーマには枚挙に遑がない。議論尽きない……。ただ、その前提にあるのは「Players First!!」である。選手不在にならない大人の議論こそ施策施行、夢実現の礎になるものと思う。